

○ウラジロフデウツギ (大井次三郎) Jisaburo OHWI: On the validity of *Buddleja venenifera* Makino.

本邦の暖地にはコフデウツギとその變種であるウラジロフデウツギとが知られている。コフデウツギの學名には琉球から記載された *Buddleja curviflora* Hook. et Arn. が用ひられているが、*B. curviflora* は枝が4角であつて、葉には下面に密毛のあるのとのないところがあるが、先きはそれ程伸長せず、萼歯は甚だ低い3角形で、花冠は外面には星毛がなくて腺狀の鱗片を著しく生じ、花筒はやはりゆるく曲るがその中央部附近内面に薬がある。屋久島及び種子島以北の形は外形は之れに似ているが、枝は圓くて殆ど稜さへもなく、葉は先きが長く伸び、萼歯は稍高い3角形で、花冠は外面に軟かい星毛があり、筒の中央よりも少し高い所の内面に薬がつく。従つて此の兩者は全くの別種であつて、日本の植物にはウラジロフデウツギに用ひられた學名 *Buddleja venenifera* Makino が生きる様で、その密毛のない形即ちコフデウツギには名前がない事になるので一應 *Buddleja venenifera* forma *calvescens* Ohwi, form. nov.—foliis subtus tomento ferrugineo destitutis. Typus: Kiushiu. Manega-hira, Ooguchi in Satsuma, leg. S. Muramatsu, NSM. No.59160, in Hb. Nat. Sci. Mus. Tokyo) の名を與へたいが、中間型に乏しくはない。

琉球の形は *Buddleja curviflora* Hook. et Arn. であるが、和名にはシマヤマフデウツギを用ひたい。尙南支那に生じ、本邦で稀に栽培される *Buddleja Lindleyana* Fortune と殆ど區別する事が出來ないので或は南支那にも分布するのであらう。

○ママコナの名の起り (津山尙) Takasi TUYAMA: Supposed origin of a common Japanese name of *Melampyrum*.

ママコナの名の起りは牧野先生によると、この類の花の「下唇ニ稜圓形ノ飯粒狀二白點アルヲ以テ ままこなト謂フ乎。」(牧野日本植物圖鑑) とされている。數年前小生は廣島縣下可部町附近の山林中で、未だ幼いママコナの果實を展いて中をのぞき、種子を檢べたことがあつた。ママコナの成熟した種子はギリシャ語の屬名が物語るように黒い穀粒の形をしているが、いささか瘦せて骨ばつている。しかし幼い種子は白く豊満であり、もう少し熟したものは内地米系の米粒よりは少しく細長いが、その形といい、つやといい、やや黄ばんだ色着きと共に玄米にそっくりである。子供達がこれを集めてまとめてにすれば誠に迫眞性のある遊が出来ることであろう。日本の何處かでこうした發見をした子供らがママコナの名を口にし始めたと言うこともあり得よう。ママコナの若い種子に關しては悠齋の草木圖說第十一卷の「内ニ稜圓ノ二子アリ、ソノ未熟ヤ、白色ニシテ本ニ蒂ノ如キ形色アリ」の文章及び圖版中ノ「未熟種子郭大圖」とを參照されたい。